同志社人物誌　(19)

高木庄太郎

田畑　忍

一

高木庄太郎先生は、同志社中学を経て、大正五年に同志社大学の法学部を、秦孝治郎氏・菊池武紀氏・河原政勝氏・故満永寅一氏などとともに卒業されている。

学生の頃から政治家を志されていたが、卒業後最初の就職は、苦学生として勤務された京都電燈会社であった。が、間もなく、原田助同志社社長の懇望により秘書兼大学学生監に就任された。のち同志社の主幹となり、大学講師を兼任して政治史を担当された。そして助教授になり、教授になられた。先生の政治史は主としてヨーロッパ各国政治史で、イギリス政治史に特別の関心を示された。大先輩の浮田和民先生・グーチ教授・ブートミー教授・トライチュケ教授らの諸労作を愛読されていたが、傾倒されたのはブートミーとトライチュケであった。昭和十一年にフランスへ私費留学されたのも、ブートミーの政治学校にゆくのが主目的の一つであり、そのパリだよりにもそのことがしるされている（註）。

（註）……「二十日セーヌ河左岸のサン、ギョウム通に政治学校を訪れた。……十七年前同志社入学の目的を以て同校へ行った時と同じ感情が胸にこみ上げてきた。創立者ブウトミイの胸像が正面の壁に刻まれてある、なつかしい姿だ。……私の外遊は仏に於てブウトミイと其遺業に接することと独に於てトライチケと其遺風に触れることが目的の大部分である。ブウトミイの墓はモントパアナツスに在る。遥かに遠い東の異国人が手向けの花束を彼は欣んで享けてくれるであろう、七年前から期待していた恩人への展墓ができて私のたとへがたき謝心は燃える……」（『巴里より』高木生、「同志社時報」大正十一年十月号）。以て、ブートミーへのその傾倒ぶりを知ることができよう。

当時わたくしたちは、先生の講義によって、グラッドストーンやディスレリーやロイド　ジョージやアスキスなどの政治家に強い興味を惹かれた。しかし先生が最も熱を入れられたのはアイルランド問題である。パーネ

ルやデーヴァレラなどのアイルランド政治家に寄せられた熱情は特に印象的であった。またアイルランド問題への関心が朝鮮問題に対する熱意に通じていた。先生が朝鮮の人たちに親切にされたのも、そのことと無関係でなかった。その後、アイルランドはイギリスから独立し、朝鮮もまた太平洋戦争における日本の大敗によって独立した。

二

私は小学生のときに先生を知る機会に恵まれた。そのとき先生は同志社大学政治科の学生で、草津キリスト教会の伝道師であった。その前に、救世軍京都小隊の兵士だったこともあり、救世軍への関心と協力を生涯持続された。カトリックのミサに通われたこともあった。また日蓮宗の故本田義英博士などの仏教の方々とも親しくされていた。深草瑞光寺の元政上人は先生私淑の高僧の一人である（先生の雅号「艸山」は元政上人の『艸山集』に由来している）。私は日曜学校などでこのような先生の導きを受けて啓発された。とくにリンカーンやガーフィールドの物語を聞いて感動した。また小学校を卒業後早稲田に進むつもりで講義録を読んでいた私は、先生の熱心な勧誘に従って同志社中学への進学の決意をしたのである。

のみならず、受験準備のため、夏期休暇の八月、桃山の菊花女学校（先生が学生時代に英語の教師をされていた）の寮に泊めていただいて、英語は高木先生、国漢は菊花の川名先生、数学は菊花の数学の先生（お名前を初めから知らなかった）に教えていただいた。大正六年九月、二年の編入学試験に合格して入学のできた同志社中学で、先ず感じたことは、先生たちがとても親切で民主的な学校だということである。すなわち教頭の波多野培根先生を始め諸先生が、生徒の人格を尊重する心構えに徹底されていたので、天国にでも入ったような心地がした。軍国主義的で官僚主義的な当時の小学校の雰囲気とはまるでちがっていたからである。また中学生ながら、山室軍平・内村鑑三・海老名弾正・賀川豊彦・ブース大将・尾崎行雄・吉野作造有島武郎先生等々の、学内外の説教や講演や特別講義を聞くことも、同志社中学なればこそ容易に可能だったと言わねばならない。また草津教会と同じ系統の膳所キリスト教会の牧師・矢部喜好先生（良心的戦争忌避の実践者であった）にも私は知っていただくことができ、このような環境で同志社大学神学科に進学することになった。ところが、神学科の予科に在学中、心臓脚気と胸部疾患にかかって二年間の休学を余儀なくされ、その静養中に法学部政治学科への転学を決意した。かくして結局先生のもとに帰ることになったのであるが、政治家になることや、政治学や憲法学の研究者になろうなどという考えは私にはすこしもなく、社会事業にでも献身しようかと言う漠然たる気持をもっていた。「同志社から政治家出でよ」と言い、「ビー　ア　リーダーシップ」と叫んでいた高木先生も、政治家または政治学者になることを直かに私にすすめられなかった。ただきわめてナチュラルに学究生活に入る道をつけて下さった。すなわち高木先生の政治史講座の継承者としての指名を受けて助手に任命されたのである。それが昭和二年のことで、その年の十二月四日、病床にあった高木先生はついに逝去されてしまった。享年三十有九才であった。

その後、政治史は高橋信司君（比較憲法）が専攻されることになり、私は大阪毎日新聞に入社した木村孫八郎君の専攻であった政治学を嗣ぐことになった。更にその後、中島重先生の

担当されていた憲法を教授会の命令で兼担することになった。しかし間接にもせよ、高木先生の配慮にあずかったものは私だけではない。右に述べた木村・高橋両君のほかに、すでに木村君と同級の高橋貞三氏（統計学）・松山斌氏（保険論）・村井藤十郎氏（商法）なども同様であり、その前に黒川芳蔵先生（金融論）が専任教授であった。吉川末次郎氏（政治学）が助手であったこともある。故塩見清講師（政治学）・河原政勝教授（国際法）・瀬川次郎教授（財政学）などの諸先生がおられ、また社会学ではすでにマッキーバーを読んでいた故永田伸也氏があり、その後任に難波紋吉教授が就任されていた。法学部（法・政・経）の同志社卒業者より成る研究陣容が、大学に発足して間もない大正後期から昭和初期にこのように確立していたのは、高木先生を軸とした中島重先生（憲法・法理学）・恒藤恭先生（国際法）らの計画によるもので、故石田秀一郎先生（経済史）・故山本亀市先生（刑法）・阿部賢一先生（財政学）・今中次麿先生（政治学）・林要先生（金融論）・能勢克男先生（民法）・住谷悦治先生（経済学史）・長谷部文雄先生（経済原論）及び文学部の石田憲次（英文学）・園頼三（美学）・大塚節治（神学）先生等の協力の結果でもあった。殊に、同志社大学を大学令による大学に逸早く昇格させた功績は、主幹兼任時代の青年・高木先生の粉骨砕身の努力に帰せられねばならない。

低級大学主義に反撥した高木先生の高度大学論の基調にあるものは、教授力の充実と、学生の質的並びに量的な拡充の主張であり、従って消極的な小人数教育主義の否定であった（高木庄太郎『大学の民主化』（同志社時報大正八年十二月号）・同『同志社大学と基督教主義』（同志社時報大正八年六月号・同『創一教育打破』（同志社時報大正十年十月号）等々及び談話参照）。

三

同志社大学を高度大学にするための熱意に燃える先生の脳裡には、専任者及び講師の招聘及び大学のエキステンション・外国留学制度の確立・学生の積極的な大量主義等々についてのプランが常に泉の如くに湧き上っていた。それだけでなく、これを速急に実行に移す行政力をもって画策されたので、地味な研究活動をする教授職よりも、むしろ経営担当の理事職に適任だと期待されていた。もっと具体的に言えば、先生は理事長・総長・学長等の職に最適任者だったということになる。しかし先生には、少壮の時代に教授職兼主幹として、そのような職責を尽すべき義務が課せられていたのである。言い換えれば、当時のシンプルな大学の機構が先生を犠牲にしたとも言えよう。もちろん先生は一私学の経営者というよりも、むしろ本多庸一・押川方義、否リンカーンらに類した政治家になるべき人物であった。先生は文章がうまくて立ちどころに出来る人であり、すばらしき討論家であり、巧みな議長であり、高邁な識見と広い視野とヒューマンな才能の持主だったからである。しかし、いざこれからという時、そうして同志社中学時代の同窓の山本宣治先生同郷の後輩の水谷長三郎君らが活躍を始めていた時、青年時代からの宿痾が遂に先生をベッドにしばりつけることになり、その政治家ぶりを発揮する機会を永久に奪ってしまった。

しかし私にとりてもっと残念なことは、先生が余りにも多忙だったために一冊の著書も残されなかったことである。また雑誌・新聞などに書かれた大学問題やアイルランド問題やトライチュケ研究についてのいくつかの文章はあるが、「同志社論叢」などのいわゆる学術雑誌に何も書いておられないことも惜し

まれてならない。フランス語で丹念につけられていたその日記も、魅力的なその講義のノートも、学界や一般の眼には触れることがないのである。しかし先生は講義を聞いた者や親しく接した者の記憶の中に、それぞれの異ったすばらしい印象を残して生きておられるのである。すなわち「勇ましくして正しく清くエーブルであった生涯」をそのような形で残されていることは、まさに内村鑑三先生のいわゆる貴重な「後世への最大遺物」であったと言えよう。おそらく創立者・新島先生は、大学の基礎を礎いた故水崎基一先生に対してと同様に、高木先生に向っても、「高木さん、よくやってくれましたね！」と言って感謝されているにちがいない。

四

私の印象に灼きついている高木像先生は、新島先生に直結した同志社マンといった面影である。例えば「手腕は人格の裏書を要す」という先生のモットーが、そのことをよく示している。それは新島先生の人格主義・良心主義を素直に継承している言葉であり、「良心を手腕に運用せよ」という新島先生の訓言を言い換えたものと言えよう。とにかく右の言葉を、私は高木先生から受けた種々の教えの集中的に表現されたものとして感得している。能書家でもあった先生はよく新島先生の漢詩を染筆されていた。また和歌を実に無雑作につくられたことも想い出される。

先生の人格またはキャラクターを一言にして言えば、「春風駘蕩としたアビリティーそのもの」とでも評し得よう。その全身に包容力とユーモアが充満しており、病羸ながらすこしも暗さがなく、実にフランクで明るくあった。それ故、敵がなくて頼ってくる者が多く、「舟中皆友」の環境が自然につくられた、と言えよう。

ハンサムでエーブルな高木先生を瞳憬する女性はもちろん多くあった。しかし先生は生涯独身を押しとおされた。また禁酒・禁煙家でもあり、生命短かき修道僧のごとき感じがあった。先生の二人の令弟と二人の令妹も、みな若くして他界された。ただ二姪が健存されている。一人は京都深草に在住して高木家を嗣いでいる正紀君の夫人・高木厚子さん（郁子さんの長女）であり、他の一人は東京に嫁している吉岡美代子さん（貞子さんの一女）である。

五

先生には二つのお墓がある。一つは若王子の同志社墓地の新島先生の墓石に相対したところに松本五平さんと永田伸也氏の墓と並んでいる。また他の一つは深草の菩提寺の墓地に在る。若王子の墓碑の「高木庄太郎之墓」の文字は賀川豊彦先生の書を刻したものでありその台石にきざんだラテン文字の「TOTUS IM SEIPSO」は、ラーネッド博士が、先生の苦学力行をあらわす「独立自助の人」を、「全てのものは彼自身の中にあり」というラテン語に意訳され、これを有賀鉄太郎博士が下書きして下さったものである。ラテン語で右の言葉を入れたのは、高木先生の遺志に従ったのである。またこれも御遺志に従って、墓前にマーガレットを植えたが、水分のすくない若王子の山頂にはついに育たなかった。深草の方に植えたいと思いつつ怠けているうちに、四十年の歳月が矢のごとくにすぎてしまった。ただ毎年十二月四日の命日には、せめてもと考えて、マーガレットの花一束を深草の墓前に供えているのである。

（理事・法学部教授）